

KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

～ベルリオーズの
幻想

第10回
春日井市交響楽団定期演奏会

で飾る10年の成果～

2001年9月2日(日)

15:00開演 14:00開場

The 10th Regular Concert

春日井市民会館

ごあいさつ



ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
鷓飼 一郎

ようやく、秋の気配を感じられるようになってきた今日この頃、本日ここに、春日井市交響楽団の、記念すべき第10回定期演奏会の開催を心からお慶び申し上げます。これもひとえに関係各位のご尽力と、市民のみなさまの温かいご支援の賜物と、心より感謝申し上げます。

今回は、定期演奏会10回目の集大成として、ベルリオーズの「幻想交響曲」が演奏されます。この曲は地方の交響楽団ではなかなか演奏することができない大曲とお聞きしておりますので、大いに期待しております。

この演奏会を通して、音楽を愛する人の輪がますます広がり、一人でも多くの方々に聴いていただけることを期待しております。

春日井市では、本年7月に「かすがい市民文化振興ビジョン」を策定し、市民のみなさま一人ひとりが文化を通して自己実現ができるまちを目指すことになりました。そのためには、本演奏会を始め、音楽を発表する場、鑑賞する機会を、もっと身近に設けることにより、音楽に親しみ、音楽を育てていただけるようにしたいと考えております。

結びに、今回の節目を契機とし、春日井市交響楽団のますますのご発展を祈念いたしますとともに、みなさまのより一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



三つの意図

春日井市交響楽団
会長

中部大学学監
三浦 昌夫

本日は、ようこそ、春日井市交響楽団第10回定期演奏会においてくださいました。市民オーケストラであります私たちにとって、多くの市民のみなさまの前で、このように毎年決まって定期演奏会を開くことができますことは、最大の喜びです。心からお礼申し上げます。

恒例の定期演奏会とはいえ、今回はいつもと異なることが三つあります。

一つは、めでたく第10回を迎えた記念の定期演奏会であることです。そのため、祝祭的なベルリオーズの「幻想交響曲」をプログラムの中心に据えました。「幻想交響曲」はまた、市民オーケストラにとって、一つの大きな目標でもあります。

次に、定期演奏会の入場料を有料にさせていただいたことです。これまでは、賛助会員の寄付と団員の参加費と春日井市の支援によって、定期演奏会は開催されて参りました。これからは、さらに充実した曲目と優れた指導者や協演者によって、なお一層演奏に緊張感と責任を持ち、一般の市民のみなさまの高度な音楽的欲求に応えてまいります。

三つには、創立以来、会長をつとめてまいりました山田和夫中部大学総長が昨年末に急逝しましたが、その遺志と創立の理念が、そのまま次代に引き継がれたことです。春日井市民がだれでも参加でき、春日井市民に満足のいく演奏を提供していく「市民オケ」であるという、創立の理念を守りながら、さらに春日井市全体の音楽的環境を高めていくような、音楽団体になるよう努めます。旧倍のご支援とご協力をお願いいたします。

それでは、10回を閲した春日井市交響楽団の現在をお聴き下さい。

プログラム Program

故山田和夫 前春日井市交響楽団会長に捧げる
亡き王女のためのパヴァーヌ [1910・6分]
モーリス・ラヴェル(1875-1937)作曲

"Pavane pour une infante defunte"
Maurice Joseph Ravel

ピアノ協奏曲第1番 ハ長調作品15 [1798・38分]
ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン (1770-1827) 作曲

第1楽章 快速に元気良く ハ長調・4/4拍子・ソナタ形式
第2楽章 ゆっくりと 変イ長調・2/2拍子・複合三部形式
第3楽章 ロンド 快速に諧謔に ハ長調・2/4拍子・ロンド形式

"Klavierkonzert Nr.1 C-dur Op.15"
Ludvig van Beethoven
Allegro con brio
Largo
Rondo allegro scherzando

《休憩》 Intermission

幻想交響曲 [1830・50分]

ルイ・エクトール・ベルリオズ (1803-1869) 作曲

第1楽章 夢・情熱 第4楽章 断頭台への行進
第2楽章 舞踏会 第5楽章 魔女の祝日の夜の夢
第3楽章 田園の風景 魔女の祝日のロンド

"Symphonie fantastique"
Louis Hector Berlioz

Reveries.Passions
Un bal
Scene aux champs
Souge d'une nuit du Sabbat
Ronde du Sabbat

演奏 春日井市交響楽団
指揮 竹本泰蔵
ピアノ フランチェスコ・ニコロージ

Orchestra Kasugai City Philharmonic Orchestra
Conductor Takemoto Taizoh
Pianist Francesco Nicolosi

プロフィール



指揮 竹本泰蔵 たけもと たいぞう Taizoh Takemoto

1956年(昭和31年)神戸生まれ
1977年(昭和52年)カラヤン・コンクール・イン・ジャパンで、ベルリン・フィルを指揮、第2位に入賞。
1981年(昭和56年)の名古屋フィル アシスタント・コンダクター就任を経て、現在コンサート、オペラ、バレエ、ミュージカルの公演指揮の他、編曲、ラジオ番組でパーソナリティーを務める等、多方面に活躍中。



ピアノ フランチェスコ・ニコロージ Francesco Nicolosi

現在ナポリに住むフランチェスコ・ニコロージはナポリ音楽の正統的な後継者で、リストやリストのライバルであったタールベルクの超絶的なピアノ編曲用「トランスクリプション」を得意としている。ニコロージは、1954年シチリア島のカタニアに生まれた。カタニアは、有名なオペラ作曲家ベルリニの生地。最初、故郷にあるヴィンツェンツォ・ベルリニ音楽院でジョバンナ・フェルロの指導を受け、次にナポリでヴィンツェンツォ・ヴィターレに学んだ。その後数々の賞と名声を手に入れた彼は、ナポリ・ピアノ学派の正統的な王位継承者としての道をずっと遠くまで歩んでいます。国際タールベルク協会会長。春日井市交響楽団には、1996年以来2度目の出演。

管弦楽 春日井市交響楽団 Kasugai City Orchestra

1990年に春日井市の音楽愛好家を中心に設立された市民オーケストラです。これまで、毎年、夏には定期演奏会を開催し、冬には「春日井市民第九演奏会」に出演するほか、「菖蒲コンサート」(桑名西ロータリー主催：1998年6月)や「菊華コンサート」[(社)春日井建設協会主催・1999年9月]をはじめとして、愛環音楽連盟の中心的なオーケストラとして「第二回愛環音楽祭」(2000年3月)を開いてきました。また、松下電気産業と松下精工両社のスポンサーで「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル」とのジョイント(2001年7月)も行いました。優れた指導者やソリストと共に、多くの仲間と演奏できる喜びを大切にしながら、「より多くの市民に、より優れた音楽を」の夢を実現するのが私たちの願いです。これからも春日井市交響楽団をよろしくご支援下さい。(団長：花村浩克)

音楽監督 都築正道 つづきまさみち Masamichi Tsudzuki

1940年名古屋市生まれ。名古屋大学文学部美学を卒業。関西学院大学大学院博士課程修了。「ワーグナーの楽劇論:音楽におけるロマン性について」で文学博士。現在中部大学国際関係学部教授。春日井市交響楽団音楽監督や(財)かすが市民文化財団の理事をつとめる。著書に「楽劇:音と言葉の美学」「あくびなしの音楽講座:トスカ」

春日井市交響楽団定期演奏会記録

定演	年月日	曲目	指揮者	ソリスト
第1回	1992/01/12	ベートーヴェン「エグモント」序曲 ビゼー「アルルの女」第2組曲 ベートーヴェン「交響曲第5番:運命」	都築正道	
第2回	1993/01/10	モーツァルト「交響曲第35番:ハフナー」 メンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」 チャイコフスキー「くるみ割り人形」より 「行進曲:トレバック・アラビアの踊り・中国の踊り・華笛の踊り・花のワルツ」	横井園生 都築正道	中川さと子(ヴァイオリン)
第3回	1994/07/17	シューベルト 歌劇「ロザムンデ」序曲 モーツァルト「フルートとハープのための協奏曲」 チャイコフスキー「交響曲第5番」	竹本泰蔵	五島憲一(フルート) 木村衣里(ハープ)
第4回	1995/07/16	ワーグナー 楽劇「ニルンベルクのマイスター・ジンガー」前奏曲 グリーグ「ピアノ協奏曲」 ブラームス「交響曲第1番」	竹本泰蔵	原 佳大(ピアノ)
第5回	1996/06/14	フンパーディンク 歌劇「ヘンゼルとグレーテル」序曲 ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第5番:皇帝」 ドボルザーク「交響曲第8番」	竹本泰蔵	フランチェスコ・ニコロージ(ピアノ)
第6回	1997/07/13	ニコライ 歌劇「ウインザーの陽気な女房たち」序曲 チャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」 ブラームス「交響曲第2番」	竹本泰蔵	宗川論理夫(ヴァイオリン)
第7回	1998/07/12	グリンカ 歌劇「ルスランとリユドミラ」序曲 ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」 ベートーヴェン「交響曲第3番:英雄」	竹本泰蔵	アレクサンダー・インチェフ(ピアノ)
第8回	1999/07/11	ドボルザーク「チェロ協奏曲」 チャイコフスキー「交響曲第6番:悲愴」 ロッシニ「セヴィリアの理髪師」	竹本泰蔵	松崎安里子(チェロ)
第9回	2000/07/09	モーツァルト「ピアノ協奏曲第24番:ハ短調」 ブラームス「交響曲第4番:ホ短調」	竹本泰蔵	エンリカ・チッカレリ(ピアノ)

音楽監督からのお話

春日井市交響楽団音楽監督 都築正道

5年前、竹本泰蔵先生にお願いして、第10回定期演奏会をクライマックスとする5年計画を立てました。まず、市民のみなさまが市民オケに期待するのは、「名曲の名演奏」でありましょう。5年間の定期演奏会の曲目を決めました。その最後の頂点に「幻想交響曲」を据えました。「幻想」は、あらゆる市民オーケストラの見果てぬ夢であり、また、すべての人を誘っては破滅させる海の魔女シーレンでもありました。「幻想交響曲」と決めた私たちはどんなに奮い立ったことでしょう。しかし、この「5年計画」を実現するために避けて通れないのが、「すべての団員の技術の向上」です。弦楽器のトレーニングと合奏練習に伊丹フィルの常任指揮者加藤完二先生のご指導をお願いしました。自らもヴァイオリンの教師で演奏家である加藤先生の鍛錬は、オーケストラにおける弦楽器の役割を学ぶに十分なものでありました。団員から、優れたコンサート・マスター/コンサート・ミストレスの誕生も待たれるところです。管楽器のトレーナーには、竹本義明先生と竹内雅一先生をお願いしました。そして、特にコーラングレが重要な部分を占める「幻想交響曲」には、諸岡研史先生にご指導とご出演をお願いしました。

今年の初めから、「幻想交響曲」の練習が始まりました。聞きしにまさる名曲で、難曲です。どの音符一つも全く油断ができません。なんらかの意味があるのです。竹本泰蔵先生の「おしゃれに」という言葉が、たえず私たちの精神を新鮮にします。大活躍の打楽器群は、高橋正実さんがまとめてくださいました。特に、第4楽章で鳴り響く鐘は、わざわざ、「幻想交響曲」用のを東京から取り寄せてくださいました。一つ60kgもします。研鑽と意欲の成果が、いよいよ、いま試されようとしています。多くの市民のみなさまに支えられて優れた芸術に挑戦し、市民会館にあふれるファンの前でそれを成就する達成感ほ、なににも勝る喜びです。これこそ、私たち音楽好きに課せられた最高の市民運動でありましょう。春日井に生きる幸せを感じます。

私たちは、この第10回の定演の最初に、山田和夫初代会長への思い出にラヴェルの《亡き王女のためのパヴァーヌ》を演奏することにしました。フルートやオーボエやクラリネットやホルンのカポの管楽器の名手たちが心をこめて美しい歌を歌い、弱音器をつけた弦楽器群が密やかに嘆きを伝えることでしよう。オーケストラ版の「亡き王女のためのパヴァーヌ」が初演された12月25日は、故山田前会長ご逝去の翌日に当たります。また、そのときの指揮者が、中部大学キャンパス・コンサートと関係の深いイタリアの「カセラ・ピアノ・コンクール」の被顕彰者アルフレード・カセラ(1883-1947)であったのも、山田前会長の音楽的な広がりを感じさせます。

また、協奏曲のソリストに、再びフランチェスコ・ニコロージを招くことができました。5年前の第5回定演で同じベートーヴェンの「皇帝」を弾いてくれました。私と個人的にも親しい彼の再来日と再協演は、また、第10回記念の喜びでもあります。'Francesco, grazie a lei!'

曲目解説

故山田和夫前春日井市交響楽団会長に捧げる

亡き王女のためのパヴァーヌ

モーリス・ラヴェル(1875-1937)作曲

《亡き王女のためのパヴァーヌ》"Pavane pour une infante defunte"
― なんだか謎めいていて、美しくも悲しい物語を期待させる曲名ですが、作曲者のラヴェル本人には別段の思いはなく、「パヴァーヌを書きたいがために、-ne -nteの韻を踏んだのだろう」と散文的に解釈されています。でも、彼の舞踊組曲《マ・メール・ロワ》(1908-

Ma mere l'oye:フランス語で「がちょう母さん」・英語では「マザー・グース」Mother Goose)の第2曲の「眠りの森の美女のパヴァーヌ」(Pavane de la belle au bois dormant)と同じように、ファンタスティックで、ロマンティックなイメージを豊かに感じさせるメルヘンとなっています。「パヴァーヌ」は「孔雀の踊り」のことで、貴族たちによって宮廷で踊られた2拍子系のゆっくりした舞曲です。私たちはこの優雅で愁いに満ちた曲を、思い出深い故山田和夫前春日井市交響楽団会長に捧げます。

モーリス・ラヴェルは、1875年にフランスのピレーネ山麓のシブールで生まれました。そのため、「私には、バスク人の血が流れている」といつもいっていましたが、これもバスク人の戦闘的で妥協のない孤立性にかこつけて、フランスの音楽界における自己の立場を正当化しようとする彼の「エクスキューズ」(言い訳)の一つです。この彼のバスク性は、「印象主義音楽技法創始者」の栄誉をドビュッシー(1862-1918)と争うときにも発揮されました。ラヴェルは1901年にピアノ曲《水の戯れ》を作曲し、翌年の4月5日に、ピアノ曲《逝ける王女のためのパヴァーヌ》と一緒に国民音楽協会の演奏会で初演しました。これはまさに、「音楽の印象派の誕生」を告げるものでした。当時のラヴェルは、まだバリ音楽院の作曲家の学生でしたが、この作品によって一躍新進作曲家として認められるようになりました。ところが、ラヴェルはドビュッシーよりも13歳若いので、常識的な批評家たちから、「この音楽の独創性は若いラヴェルが年上のドビュッシーを真似たものだ」と断定的に決めつけました。時を見て、自尊心の強いラヴェルは、「印象主義音楽技法創始者」であることを立証するために、批評家の一人ピエール・ラロに宛てて次のように書き送りました
― 「君はある種の特定のピアノ作品について長々と論じ、この手法はドビュッシーが創始したと述べている。しかし《水の戯れ》は1902年の初めに出ている。その当時知られていたドビュッシーのピアノ曲といえば、《ピアノのために》を形成する3曲だけであり、これらの曲は、もちろん、私としては深く敬服するものの、ピアノ手法の見地だけからすれば、真に新しいものは何も伝えていない」。その通りで、《水の戯れ》が書かれた時には、ドビュッシーはまだピアノ曲は、《ベルガマスク組曲》と《ピアノのために》の第2曲「サラバンド」しか書いていず、特に、「これこそ印象主義的ピアノ曲」と認められるドビュッシーの《映像1》の「水の反映」は、ラヴェルの《水の戯れ》よりも4年遅い1905年に書かれたものです。

しかし、「これぞ印象派」といえるドビュッシーの革新的な管弦楽曲《牧神の午後への前奏曲》は、《水の戯れ》よりはるかに古く、1882年から85年にかけて作曲されていて、初演は1886年ですから、ピアノの分野ではラヴェルだとしても、ジャンルを越えた音楽史的な意味での印象主義の先駆けは、やはりドビュッシーだといっているでしょう。でも、先陣争いよりも重要なのは、作品の独創性と完成度です。《亡き王女のためのパヴァーヌ》は、1899年にピアノ曲として発表されましたが、1910年にオーケストラ化され初演されました。小編成のオーケストラにハーブが加わり、緩やかな「レント」(遅く)の速さで、4拍子で古典的に、弱音器をつけて華やかではないが静謐に、ト長調の輝く銀色の響きで、典雅なグジャクの舞いが三つの主題によって天国的に踊られます。研ぎ澄まされた感性の働きが、そのまま感動となる、印象主義の勝利を物語る名作です。

ピアノ協奏曲第1番ハ長調

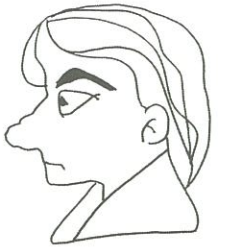
ルートヴィヒ・ファン・

ベートーヴェン(1770-1827)作曲

「ベートーヴェンはボンで生まれた」というのは、なんら英語の洒落ではありません。ベートーヴェンは、ヘーゲルと同じ1770年に生まれ、ナポレオンより一歳年下でした。

彼ら三人はフランス革命に遅れて来た青年たちでしたが、各々の生き方で革命後の激しい時代を使命感をもって切り拓いていったのも彼らでした。特にベートーヴェンは、フランス革命の年(1789年19歳)にボン大学の聴講生になり、講壇から熱っぽく説く革命派の教授たちの革命思想に鼓舞された若者の一人でありました。22歳(1792年)のとき、数年の留学のつもりでやって来たウィーンでしたが、ボンも革命軍の侵入でナポロンの選帝侯マキシミリアン・フランツが逃げ出したので、仕送りのお金もなく、故郷へ帰ることもできず、幸か不幸か、そのまま音楽の都ウィーンに放り出されてしまいました。ベートーヴェンは、やむなく、ピアニストとして、ピアノ教師として、作曲家・編曲家として、すなわちウィーンの音楽家として生きていく決心をしました。確実に早く名声を上げるためには、自作自演に限ります。ベートーヴェンは、彼がもっとも得意とするピアノを中心とした作品を次々に作曲して、自らそれを演奏して発表しました。彼のウィーン初期の名作、「ピアノ・ソナタ」作品2の3曲(1793-95)や「ピアノ三重奏曲」作品1の3曲(1793-95)、そして二つの「ピアノ協奏曲」作品15 と作品19がそれです。

それで、ピアノ協奏曲ですが、いつも問題になることが二つあります。「彼は何曲のピアノ協奏曲を書いたか」と「第1番ハ長調と第2番変ロ長調は、どちらが先に書かれたか」です。第1の問題の答えは、14歳で書いた「変ホ長調」(WoO4)と「ヴァイオリン協奏曲」をピアノ協奏曲に編曲したのも含めて、全部で7曲です。第2の問題の答えは、次の対比表からお考え下さい。



「ハ長調」の方が、演奏時間も、楽器編成も、格段に長く大きくなっているのも、あとで書かれたことが分かります。でも、決め手は出版年月日です。「ハ長調」の方が数ヶ月早く出版されているので、こちらが「第1番」となりました。このことは、シューマンのピアノ協奏曲でも誤解を生じ、とても不思議な謎が生まれましたが、それはまたのお楽しみ。さて、音楽ですが、文句なしに「青春そのもの」です。速くて、躍動感漲る第1楽章 ― といっても余り速く感じないのは、「4/4拍子」(4分音符を1拍と数えて1小節に4拍あること)を、倍速い「4/2拍子」(2分音符を1拍と数えて2小節に4拍あること)と数えてしまうからです。第2楽章は、もっとも遅い「ラルゴ」 ― といっても、余り遅く感じないのは、オーケストラのゆっくりした牛歩の歩みの間を、ピアノのソロが獵犬のように飛び回るからです。「2/2拍子」なのですが、ピアノだけ倍速い「4/4拍子」です。そして、お待ちかねの終楽章の「スケルツォ風ロンド」です。また2拍子(2/4拍子)です。「用意ドン!」とばかりに、ソロとオーケストラが一斉に走り出します。まさに競争曲であり、狂想曲であり、狂騒曲であり、強壯曲です。ここでもまた、一定の速さで最後まで走りきる「イン・テンポ感」がとても大切です。ゴール前の激しいせめぎ合いが、また楽しいものです。問題をもう一つ ― 「なぜ、3拍子一つもないのですか?」。答えは、「全体がハンガリー風だから」です。当時のハンガリー音楽は、ジプシー音楽のことでした。ジプシー音楽は2拍子です。ベートーヴェンは、自己の新世紀的に斬新な音楽的発想が誤解されずに、いえ、誤解されても、「ああ、ハンガリーなのだな」と許される様式を選んだのです。それに、楽天的で軽薄で陽気で粋なウィーンの人たちは、自由で異国的で民族的でなハンガリー風音楽を文句なしに受け入れました。大成功でした。さあ、「カターニアのウグイス」ニコロージの華麗なタッチで、既にして変革の時代を意識した若きベートーヴェンの「マニフェスト」を聴きましょう。

作曲年	ピアノ協奏曲第1番ハ長調 <p>1794年末から1796年中頃</p> (ヴェーゲラー/ノッテボーム)	ピアノ協奏曲第2番変ロ長調 <p>1794年?</p>
初演年	1798年プラハ <p>1800年ウィーン初演</p>	1795年ウィーン <p>1801年10月ライブチヒ/ホフマイスター・ウント・キューネル社</p>
出版年	1801年3月ウィーン/モロ社	カルル・ニクラス・フォン・ニケ
献呈先	オデスカルク侯爵夫人	ルスバルク
演奏時間	38分	28分
楽器編成	独奏ピアノ <p>フルート2</p> <p>オーボエ2</p> <p>クラリネット2</p> <p>ファゴット2</p> <p>ホルン2</p> <p>トランペット2</p> <p>ティンパニ</p> <p>弦5部</p>	独奏ピアノ <p>フルート</p> <p>オーボエ2</p> <p>ファゴット2</p> <p>ホルン2</p> <p>弦5部</p>

幻想交響曲

エクトル・ベルリオーズ(1803-1869)



「あらゆる意味で、もっともロマン的なロマン派の音楽家は誰でしょうか」と訊ねられたら、多感なあなたは、ショパンやリストやワーグナーではなく、「あらゆる意味でベルリオーズ！」と答えることでしょう。透徹した批判精神を有し、ロマン派の運動を終始観察してきたあのティオフィール・ゴーチエ(1811-1872)もまた、典型的なロマン派の芸術家として「文学ではユーゴ、絵画ではドラクロワ、音楽ではベルリオーズ」と断言しています。あなたは同じ答えをだしています。では、なぜ、ベルリオーズなのでしょう。例えばこの「幻想交響曲」です。1832年に出版された楽譜の前書きには、彼の「ロマン派宣言」とでも言っている、夢幻的な「プログラム」が述べられています。

「異常に敏感な、そして豊かな空想力に恵まれた若い音楽家が、希望のない恋愛の故に深い絶望におちいり阿片を飲む。毒薬は彼を殺すには弱すぎたが、しかし、奇怪な幻想を伴った深い眠りに彼を投げ込んだ。彼の感覚や情緒や記憶が、冒された彼の心を通過していく時、それが音楽的な像や心象に変えられた。恋人である彼女自身は、一つの旋律、くりかえし帰ってくる「主題」(固定観念・idée fixe) ― それは絶えず彼につきまとっている ― となる」(諸井三郎さん訳)。

「幻想交響曲」が完成され、パリ音楽院で初演されたのは、ベルリオーズが27歳の1830年のことでした。ベートーヴェン(1770-1827)が亡くなってわずか三年しか経ってはいず、音楽全体が古典派のくびぎにまだしっかりとくくりつけられていた時に、このような複雑で心理的な内容を持ったプログラムを、それも言葉の援護もない絶対音楽である交響曲で、誰が一体表現しようとするのでしょうか。

「幻想交響曲」の各楽章につけられた筋書きはさらに複雑で、人生におけるさまざまな感性の移ろい、すなわち、絶望と不安、憧憬と崇高さ、恋愛と抒情、宗教と神聖さ、愚劣さと怪奇趣味にいたるまで、ロマン的と言われるものすべてが含まれています。その「プログラム」(標題)の複雑さを音楽的表現の多彩さへと転移することによって、ベルリオーズは、「プログラムの交響曲化」という前人未至の試みに挑戦し勝利を得たのでした。では、彼にこの勝利を得させたのは何だったのでしょうか。彼が「回想録」で告白して有名になったハリエット・スミスソンへの熱烈な愛であったのでしょうか。いや、そうではありません。「幻想交響曲」が完成・初演された1830年といえば、あの世紀のペテン劇「七月革命」が演じられた年であり、例の文学史上の大革命「エルナニ事件」がテアトル・フランスで勃発した年でもありました。急進的なナポリでは、この二つに代表される革新的な事件により、時代は一挙に三十年以上も進んでしまい、音楽も文学も絵画も既にしてロマン主義の真つただ中に投げ入れられたのでした。この年スタンダール(1783-1842)は、「1830年年代期」という副題を持つ『赤と黒』を発表して、偽善的な王政復古時代の政治と風俗を暴いて見せ、また、ヴィクトル・ユゴー(1802-1885)は、歴史劇「エルナニ」の上演で古典劇の伝統に挑戦し、自由への渴望と新興ブルジョアジーへの憎悪を表明して見せ、19歳の天才数学者エヴァリスト・ガロア(1811-1832)は、『方程式がベキ根によって解かれる方程式』(ガロア理論)をアカデミーへ提出し無視されました。

天才たちが一斉に、欺瞞と傲慢と無知が支配する衆愚の群れから飛び出したその1830年に、ベルリオーズも決して遅れることなく「幻想交響曲」を発表し、「社会に反逆する形而上学的十字軍」(フィロ

テ・オネデイ)の戦士の一人となったのです。まさにベルリオーズは、反逆と挫折の30年代の寵児であり、「幻想交響曲」は音楽史上の「エルナニ」でありました。それは明らかに、シェークスピア劇の一女優が能くするところではありません。

ここで執拗に繰り返し用いられている音型"l'Idée fixe"も、「固定観念」とか「固定楽想」といった「クリシェ」(常套句)として訳され理解されるよりも、「不変の理念」とか「実現された理想」とでもロマン的に解されるべきでしょう。もちろん、内容的には、寝ても覚めても忘れられない恋人の姿ですから、「執念」と言うのが正解です。前4楽章では理想の女性の姿として登場するイデー・フィクスも、終楽章では、グロテスクな結婚にまで墮落するのですから、あくまでもロマン主義的で逆説的な「イデー・ティプス」(理念型)に他なりません。むしろ、この「実現された理想」がスミスソンの艶姿でないのは後にベルリオーズも認めているところで、前作のカンタータ「エルミニ」(1828)で使われた旋律を借用したものです。

また、この借用旋律それ自身は、恋人と称するに足らず、特に美しくも魅力的でも誠実でもありません。ただ、ベートーヴェンが好んで用いた動機と本質的には同じもので、作曲技法上簡単に処理しうる音型であることに注意しておいてもいいでしょう。なぜなら、音楽史上早く生まれすぎたこの交響曲全体を流産の危険から守っているのは、全楽章の「主題労作」(Thematisch arbeit)を可能にしているベートーヴェン風のイデー・フィクスの忠実な性格のお陰でもあるからです。

実は、「幻想交響曲」の音楽史的意義は「プログラムの描写音楽化」にあるのではなく、「オーケストラの音色のプログラム化」にあります。ニュートンが光の色を七つに分けたのは、音楽が4からシまでの七つの音で出来ていたからでした。彼が無類のバレットをもったベルリオーズのこの交響曲を聴いたら、大いに喜んだことでしょう。これほど多くの色彩の輝きが聴かれる音楽はまずないでしょう。「幻想交響曲」も、ベートーヴェンの「田園交響曲」の標題の森から生まれました。例えば、弦を弓の背(木部)で打つ特異な「コール・レーニョ」の技法を交響曲でそのまま用いれば、大反対にあうことでしょう。そこでベルリオーズが考えたのが、「田園」方式です。ベートーヴェンがファゴットを「老農夫の繰り言だ」といったように、「コール・レーニョ」ではなくガタガタ鳴る骸骨の踊りだ」といえばいいのです。かくて、交響曲は音色の新大陸を発見したのでした。

ベルリオーズは、五つのそれぞれの楽章に「プログラム」(タイトル)と「解説」をつけました。私たちは、この「幻想交響曲」を聴く前に、どうしても彼のこのタイトルと説明を聞かされることになります。音楽家らしくない、このベルリオーズの言葉による無理強いを「是」とするか「非」とするかによって、私たちのこの交響曲と音楽に対する「美学」が定まります。でも、あなたが確たる美学を持つならば、どんな情報でも、多ければ多いほど良いでしょう。「解説」を諸井三郎さんの訳でご紹介しておきます。

第1楽章 「夢と情熱」

最初、彼は魂の疲れを、漠然とした渇きを、薄暗い憂鬱を、そしてあてのない喜びをおぼえる。それらは、彼が恋人に出会う以前に経験したものである。それから、彼女によって靈感された爆発的な恋愛、精神錯乱した苦悩、やさしさへの復帰、宗教的な懺悔がおこる。

物憂げなため息と「アンニュイ」(倦怠感)で始まります。この長い退屈な序奏で、どれほど人間の心理だけを現すことが出来る かで、まずオーケストラの技術と質と感性が問われます。あくまでも繊細でたおやかなニュアンスがオーケストラ全員に要求されるのです。すべてのオーケストラにとって、極めて危険な導入部です。

第2楽章 「舞踏会」

舞踏会 のとき、さわがしさと、華やかなお祭り騒ぎのなかにおいて、彼は再び恋人を見いだす。

バレエ好きなフランス人にとって、舞踏会ならなんでも大歓迎です。従来なら交響曲の中間楽章は、貴族的なゆっくりした「メヌエツト」と決まっています。もちろん、大革命後のナポリなら、盛大で華やかでちよっぴり速いワルツです。たくさん楽器がそろっているフル・オーケストラは、たくさんのカップルが色とりどりに、自由に、華やかに、てんでばらばらに踊り回るさまを描いています。さあ、あなたの耳で、どこで、だれが、どう踊っているかを聞き分けて下さい。舞踏会の踊りは、「ドシラソファミレド」と下降してくる音階(クラリネットとホルン)で締められます。踊り足りない人たち(ヴァイオリン群)は、そんなことにお構いなく、速く速く踊りつづけます。この下降音階はチャイコフスキーが「悲愴交響曲」の舞曲で真似をしています。

第3楽章 「田園の風景」

田園における夏の夕方、彼は二人の牧人が羊飼いの笛でお互いに呼び合っているのを聞く。このような環境のなかででの田園的なデュエツト、風へのつやわらかにゆれる木々のおだやかなざわめき、最近彼に知られるようになった希望へのある根拠 ― これらのものがすべて一つになって、彼の心は穏やかな静けさによってみたまされ、彼の空想には明るい色彩がつけられる。しかし彼の恋人があらためて現れ、けいれんが彼の心におこり、そして彼は暗い予感によってみたまされる。もしも彼女が彼をすてたならば? 牧人の一人だけが彼の田園的な歌を再び始める。陽は落ちる。遠くに雷鳴がひびく ― 孤独 ― 静寂。

寂しい、郷愁を誘う、木管楽器コーラングレが活躍します。「コーラングレ」とは、低音の木管楽器の一つで、'cor anglais' と書きます。文字通り「イギリス(アングレ)のホルン(コル)」という意味ですので、日本では英語を使って「イングリッシュ・ホルン」と言っていますが、ホルンではありません。オーボエ(「高い木管」の意)の一種で、オーボエよりも大きく(81センチほど)、一段低い音(5度下)が出ます。開放的な田園でささやかな二人の牧人の会話は、オーボエが娘、コーラングレが若者と言うことになります。吹き口は「く」の字に手前へ曲がっていて大きくても扱いやすくなっています。憂いをおびた暗い音に特色があり、シベリウスの「トゥオネラの白鳥」(死の国にいる)や故郷を思って歌うドボルザークの「新世界より」の第2楽章などは、「コーラングレ」ならではの名場面と言えます。名手諸岡研史さんが吹きます。遠くの方(舞台の外)でオーボエがそれに応えます。雷鳴は、四人の打楽器奏者が一斉に四つのティンパニを力一杯たたきます。嵐が去ったあと、自然は一斉にしずくを払います。フル・オーケストラが半音階づつ、ブル・ブルと身を震わせながら降りてきます。このときの和音進行が、また聴きどころです。、ギター奏者が左手のグリッスをパツ・パツ・パツ・パツと替えていく操作を思い出させます。ベルリオーズの父親は、彼にピアノよりもギターをすすめました。息子は忠実にその教えを守りました。ピアノに頼る安易な作曲法からは、

決して「幻想交響曲」は生まれなかったことが、この「しずく払い」から分かります。

第4楽章 「断頭台への行進」

彼は恋人を殺したことを夢見る。彼は死刑を宣告され、刑場にひかれる。その行列には、あるときは荘重で華やかな行進曲がともなう。騒がしい爆発はただちに規則正しい歩みの重々しい響きによってつづけられる。最後に、愛への最後の思いのように固定観念があらわれるが、それは斧の落下によって切りとられる。

初演のときに、唯一人気があった楽章です。だれをも、あのフランス革命で捕らえられたルイ16世とマリーアントワネット王妃が首をはねられるその現場に連れ戻します。行進曲を良く聴くと、これもまた単純な下降音階になっているのが分かります ― 「ファミレドシラソファミレドシラソファ」。処刑の合図の太鼓が鳴り、命乞いをする女の声を聞かばこそ、ギロチンの刃がドスンと落ちる(フル・オーケストラ)と、首がコンコロリと転がり(弦のピツィカツト)、市民は「万歳! 万歳!」と子どもども叫びます(ファンファール)。

第5楽章 魔女の祝日の夜の夢

彼は魔女の祝日(サバト) ― それは彼自身の埋葬でもあるのだが ― に参加していると思っている。それは幽霊や魔法使いやあらゆる種類の化け物の恐ろしい群れによって囲まれている。不気味な音、うなり声、キーキーという笑い声、遠くからの叫び声、それらにまたほかのものが応えているように見える。彼の恋人の旋律が聞こえてくる。しかしそれは、気高さや憤しさを失っている。そのかわりに、それはいまや、嫌らしい踊りの調子、つまらないグロテスクなものとなっている。彼女は魔女の祝日にふさわしい喜びの叫びのあいさつをうけて到着する。彼女は、悪魔の饗宴に加わる。そこで、葬式の鐘、「怒りの日」のこっけいな旋律が響く。魔女たちの踊り。その踊りと「怒りの日」が一体となる。

ベルリオーズはシェイクスピアとゲーテが大好きでした。特に、ゲーテの「ファウスト」には驚いて、リストにまで読むようにすすめました。「ファウスト」に出てくる「ワルビルギスの夜」の場面もまた、彼のお気に入りでした。魔女の力をもっとも強くなるのがこの夜です。「ワルビルギスの夜」は、フランスやイタリアでは、「サバト」といいます。「土曜日」'Saturday'の元になった言葉です。不気味な音と共に魔女たちが集まってきます。死んだ女を吊らう鐘が「ゴーン、ゴーン」と鳴るとグレゴリオ聖歌の「怒りの日」が聞こえてきます。一瞬たじろぐ魔女たち。 ― したたかな彼女たちは、聖なる歌を伴奏し踊り始めます。そして、それが極まる「魔女の祝日の Rond」のコーダと変わります。交響曲の終曲を、定型通り「Rond形式」にしたのはいいのですが、それを「魔女たちの乱舞」にパロディ化してみせるところが、異端者ベルリオーズです。フーガによる Rond なので、魔女たちが、大勢、それも本当に大勢集まって、あちらこちらで大騒ぎをしているのがとても立体的に分かります。みなさんの目の前をホウキに乗った魔女たちがキーキーいながら飛び交っています。「怒りの日」がその伴奏をつとめます。